

青梅市文化財ニュース

第 3 7 5 号

平成 3 1 年 1 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

青梅市立河辺小学校

この文化財ニュースでは、今まで市立成木小学校まで紹介してきました。これからご紹介する河辺小学校は、今までの学校と違い、青梅市が発展していく中で青梅市が設置した学校です。今までの学校のように 100 年以上(四小除く)の歴史があるわけではありません。

現在の河辺町の前身は河辺村です。河辺村のことについて少しおさらいをしてみます。

河辺村というのは、多摩川の河岸段丘の下に古くから人々が住み始めたのが前身です(今の 1 ~ 3 丁目)。江戸時代は年貢を納める行政単位となっていました。時代は明治になり、明治 5 (1872) 年 8 月 2 日(旧暦)に「学制」が發布され、各村々は学校を設置しなければならなくなりました。河辺村でも、東圓寺に「桃盛学舎」という学校が建てられますが、これが河辺小学校の原型ではありません。明治 22(1889)年の市制町村制が施行されたことにより、河辺村は対岸の友田・長淵、隣接する千ヶ瀬などの各村々と合併し、「調布村」になります。調布村ができると村の学校は調布尋常高等小学校(現二小)が中心で、河辺村の学校は、調布尋常高等小学校河辺分教場となります。そして、東圓寺からいつ移ったかは資料が乏しくよくわからなかったのですが、現在の河辺南自治会館の所に河辺分教場が建てられ、1 年生から 4 年生が大正 9 (1920) 年まで学舎として通いました。高学年や高等科の子供達は川を渡って下長淵の本校(現二小の所)まで通っていました。

河辺の分教場も大正 9 (1920) 年で終了し、河辺と千ヶ瀬の分教場を一つにして、「調布尋常小学校」が千ヶ瀬町 2 丁目の現二中の所に建てられ、千ヶ瀬の子と一緒に勉強するようになりました。(多分財政上の問題等が原因ではなかったかと想像されます。)

時代は昭和になり、同 2 (1927) 年 2 月に小作駅と青梅駅の間に河辺駅が開業します。河辺の河原から砂利を採取するためです。駅ができると今まで人家のなかった段丘上に何軒か家が建ちましたが、段丘上からも千ヶ瀬の学校に通って行きました。さらに昭和 8 (1933) 年には、旧下奥多摩橋(吊り橋)が架橋され、南北の行き来が非常に便利になり、本校(現二小)への通学がしやすくなりました。この調布尋常小学校は高等科を有してはいませんでした、「分教場」等の名称がないところを見ると下長淵の学校(現二小)の分校というより、独立した調布村の 2 番目の学校という意味合いが強いのかとも思います。理由として、昭和 16(1941)年に太平洋戦争が始まると国民学校令が出て、名称が「国民学校」になるのですが、下長淵の学校が「調布村立調布第一国民学校」、千ヶ瀬の学校が「同 第二国民学校」という名称になったからです。

しかし、戦後の昭和 22(1947)年、新制中学校を千ヶ瀬の「第二国民学校」(現二中)の所に作りましたが、河辺地区の子もいるため(河辺から現二小までは遠い) 1 年生だけは残して「千ヶ瀬分校」(現二

中の所)としてここに通いました。しかし、戦後のベビーブームのため昭和 36(1961)年 9 月には分校を廃して、1 年生も現二小まで通いました。これで千ヶ瀬分教場はなくなり調布中学校となりました。

話は少しさかのぼりますが、調布村は、青梅町・霞村と合併して、昭和 26(1951)年に青梅市になります。そして、昭和 30(1955)年には近隣の村々も合併して、現在の青梅市が出来上がります。市制を敷いた青梅市は、これ以降急速に都市化を進めていきます。東青梅以東の広大な武蔵野台地の開発に着手していくわけです。東青梅地区区画整理事業・河辺駅北口区画整理事業・新町地区土地区画整理事業などです。広大な畑作地域に広い道路を作り上下水道を引き宅地化していきました。何もなくて、あたり一面畑だけの河辺駅周辺です。計画通りに土地区画整理ができ、瞬く間に住宅が建ち始めました。都や住宅公団の団地も誘致されました。河辺駅の周りは昭和 45(1970)年以降急速に家が建っていきます。筆者は野上町 1 丁目で生れ育ちました。そして、昭和 45(1970)年時には中学 3 年生で、その年の青梅市の中学校駅伝大会が河辺駅周辺の道路を使って開かれました。この大会に第 3 中学校の B 代表として出場しました。今となってはどこを走ったのか全く分かりませんが、ローラーで平らにして、コールトールを撒いただけの広い道路だけではできていて、周りはすべて畑の中を、1 周 2.5Km〜3Km ぐらいのコースを走った思い出があります。また、高校に通うようになりましたが、昭和 47(1972)年までは河辺駅に北口はなく、青梅市立総合病院の入り口の方をぐるりと回り河辺駅南口へ行かねばならず、結局河辺駅へ行く方が遠くなってしまうので、高校 2 年生の途中まで東青梅駅を利用していました。昭和 47 年には河辺駅が橋上駅になり、北口が開通すると河辺駅を利用するようになりました。北口が開通すると、線路の北側にもどんどん大きな建物ができていきました。

河辺地区の区画整理事業は、昭和 38(1963)年に始まり、昭和 48(1973)年に終わりましたが、人口が急激に増えていったため、新たにこの地域に学校を建設する必要に迫られました。そこで、当初からの計画にあった河辺町 5 丁目 24 番地に河辺小学校を建設します。初代校長は原嶋八三郎氏でした。昭和 46(1971)年 4 月に開校式と入学式を行いますが、校舎は突貫工事で作ったプレハブの校舎で行われました。全校児童 363 人、教職員 19 人でスタートした河辺小学校でした。そして、6 月 10 日に一部完成した新校舎での授業が始まりました。工事が完了し竣工式が行われたのが 1 年半後の昭和 48(1973)年 1 月 6 日でした。

工事が完了し、これで一安心と思いきや、児童数が増え続け第 1・2・3 期と増築工事をしたにも拘わらず、最大期には 1250 名を数えるようになり、近くにもう 1 校建築することになりました。それが霞台小学校で昭和 50(1975)年 3 月に 167 人が異動していきました。異動したのは、野上町と師岡町 3 丁目の子供達でした。

ところが、それだけではまだ足りず、昭和 53(1978)年に若草小学校が完成し、なんと 667 名の児童が若草小学校に異動していきました。移ったのは、河辺町 7〜10 丁目に住んでいる子供達でした。

最大 1250 名を数えた河辺小学校でしたが、現在は藤原輝正校長の下 15 学級 480 名(1 月 8 日現在)の子供達が、勉学に励んでいます。河辺小学校の特徴はというと「ことばと聞こえの教室」という特別支援教室があることです。また、平成 19(2007)年には東京都愛鳥モデル校の指定を受け、愛鳥教育にも力を入れているとのこと。

(文責 神森 正)

(参考文献：青梅市史・河辺小学校 PTA 記念誌)